

津本陽

拳豪

けんごうでん

伝



比翼切
空印



是色
空印



けんこうでん
拳豪伝

つもとよう
津本陽

© Yo Tsumoto 1988



講談社文庫

定価580円

1988年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願
いいたします。(庫一)

ISBN4-06-184340-0 (0)



講談社文庫

拳豪伝

講談社

目次

竜王

七

破戒

一〇七

忍の一字

一九二

備後路

二六〇

行雲流水

三六〇

むらさきの雲

四二六

解説

石井富士弥

五〇一

拳豪伝

竜 王

陽が落ちて一刻（二時間）は経つというのに、地上には昼間の炎暑のほてりが、重くよどんでいた。

風が凧いでいて、湯のような空気にひたっていると、動かずにも額に汗がにじみでてる。

尾道千光寺山の頂に、大勢の人影がたたずんでいた。

「あつ、また光ったぞ。あれは稲光じやろうが」

「それにしては、色が赤えのう」

「天地が乾ききりよったら、あのような光が出るんじゃないかうか」

ひとびとは尾道と狭い小道をへだてて横たわる、向島の高見山の頂上を浮きあがらせる怪しい光芒を、見ていた。

赤みがかった稲光は、二、三十回呼吸するほどの間を置いて、南の方角の空を染める。

「こりや、どうにもいけんのう」

誰かが失望の声を放った。

「空に湿り気ちゅうものが、まったくなからうが。この分なら、明日も晴天じやろう」

そのあと、陰気な沈黙がつづいた。

尾道湊の背後にひろがる山峡の在所で、打ち鳴らす雨乞いの太鼓の音が、どろどろと鳴っている。

天保四年（一八三三）七月の山陽路は、未曾有の旱魃にみまわれていた。すでにひと月あまりまえから、一滴の降雨もないのである。

収穫の秋を間近にひかえた田圃はひび割れ、稲は枯れ死寸前の状態になっている。溜池の水は涸れはて、井戸水の水位もいちじるしく下がり、住民は茶碗を洗う水さえ惜しんでいる。

「とにかく、ひでえもんじゃ。今日も阿草のあたりまでいったんじゃが、田圃の泥が亀甲の形に割れておつてのう。稲は総倒れじゃ。見渡すかぎり、そがいな眺めじゃけえ、儂や気色悪うなつた。天の咎めというもんじゃろうかと、思つてのう」

ひとりがいうと、別の声が応じる。

「そうじゃ、天の咎めじゃろう。在所では竹槍蓆旗で水争いに血の雨を降らしておるそうじゃが、のどかな尾道も、いまに食い物を漁る人間どもの、争いの場となるかも知れんぞ」

聞のなかで、ためいきが聞こえた。

「ひとつ、われわれも雨乞いをやろうかのう」

誰かがいいでした。

「僕は漁師じゃが、日照りがつづいて難儀するのは、農家のお人らとは変わらん。海の水が雨が降らずに塩辛うなりすぎれば、魚も獲れんようになる。雨乞いを在所にばかり任せておらずに、われわれもやろう」

言い出したのが吉和浜の網元、勘三郎であると知って、居あわせた人は耳をかたむける。彼は、尾道の禅寺済法寺の檀家総代であった。

「済法寺の和尚さんは、諸国で修業学問してきんさった善知識じゃ。江戸駒込吉祥寺山内梅檀林（駒沢大学の前身）にも、三年間の掛錫しんさつて、勉強なさったそうじゃ。そがいな偉い和尚さまに、ひとつ雨乞いをお願いしようではないか」

周囲の者は、賛成する。

「そりや、ええ考えじゃ。さつそく明日にもお願いしてくんさいや。頼みますらあ」

勘三郎は翌朝、他の総代たちを訪ね、雨乞いの一件を相談した。

「そりや、ええ考えじゃ。それでは物外禅師にご祈禱をお願いしよう」

合議は一決し、総代たちは揃って済法寺に出向いた。

住職武田物外は三十八歳の男盛りであった。彼は広島城下伝福寺観光和尚の弟子であったが、四年前、なかく無住であった済法寺の、後住となったのである。

物外は書院で総代たちの依頼を聞くと、ただちに承諾した。彼は身の丈五尺八寸と、ひとなみはずれた長身で、そのうえ肥えふとっているので、声音は余韻を帯び、よく透る。

「よかろう、このたびの旱魃は非常のものじゃのう。それゆえ、尋常一様の祈禱では靈驗もおぼつかないことじやろう。そこで、僕にはひとつ考えがあるが、いうてもよかろうかの」

物外は丸い眼を剥いて聞き、総代たちは応じる。

「どうぞ、何なりとおっしゃって下さりませ」

「そうか、そんならいうがの。当寺の梵鐘を海中の竜神に献じて、八大竜王の加護を仰げば、願望が成就するかも分からんと、思うのじゃ。この梵鐘は、寄進してくれた施主家もあることゆえ、断りなく献ずるわけにもゆくまいが、お前がたと僕とが同道して施主家にゆき、頼めば応じてくれぬでもなからう」

総代たちは物外の意見に同意する。

「あの梵鐘は栗原村の小三郎が寄進したものじゃ。すぐ近所じゃけえ、いまから参って頼みましようや」

物外は総代一行をひきつれ、小三郎の家を訪れる。

「小三郎殿、このたびは旱魃はげしく諸民難儀の状、見るに忍び難く、当寺の総代方の合議一決して、僕が雨乞いの行をおこなうことになったのじゃ。ついてはそなたにお頼みがある」

物外は、梵鐘を海中の竜神に献じたいと、小三郎に頼んだ。

「さようなことにお使いただけるならば、諸人のお役に立てることじゃ。梵鐘はもはやお寺に献じたものゆえ、和尚様がいかようになされても、文句はございませぬ」

小三郎は快諾した。

梵鐘の目方は百貫匁を越すものであった。檀家の主人たちが大勢寄りあつまり、それを鐘樓から下ろして、荷車に積む。

千光寺山西麓にある済法寺山内からは、急な石段が表通りまでつづいている。数十人の男たちは、荷車が急に走りださないよう太綱をつけ、後ろから引つ張りつつ静かに石段をおろしてゆく。

物外は袈裟姿で彼らのあとから黙然と従った。吉和村の浜辺へ着くと、黒山のような見物人であつた。

網元勘三郎は水主方（かこがた）を呼びあつめ、魚獲を運ぶ五十集舟二艘を並べ、双方の舷（かたがは）に三本の杉丸太をかけ渡した。

丸太の中央に梵鐘を吊る作業が難渋をきわめたが、ようやく支度を終える。

「さあ、行くぞ」

群集の読経と歓声の湧きたつなかを、五十集舟は静かに櫓をきしませ、沖へ出てゆく。

物外は総代らとともに、陽覆（ひおほ）いのよしずの下にいた。向島と岩子島の間を沖へ出ると、五十集舟は碇（いかり）をおろす。

物外は香を薫（くん）じ、船中に座禪（ざぜん）入定（にやうじやう）する。

「かしこみ天上の八大竜王にものもうす。我はこののち十七日間、昼夜を分かたず祈願をいたすなれば、竜神もし雨を降らしたらんには、その報酬としてこの梵鐘を海中に沈むべし」

物外は雨が降るまでは、その座を立たない決心をかためていた。

連日晴天が続き、海面は眩しく陽をはじいて、おだやかなうねりをくりかえす。海中には海月が群れをなして浮遊し、船中には熱気がたちこめて睡気を誘う。

連日の祈願にもかかわらず、効験は容易にあらわれない。

「やっぱり和尚さんでも、あかんかのう。雨は降らんのかや」

「弱気なことは、口にするでなあぞ。満願はまだ先じゃ。ご祈禱はじまったばかりじゃろうが」

付き添いの総代たちの気持ちも乱れる。

七日めの朝、しだいに波上が明るくなってくると、勘三郎たちは沖から寄せてくる微風に、水のおいを嗅いだ。

「おう、風が湿りを帯びておるぞ。しかも南風じゃ。おい、空を見よ、雲が出とろうが」
頭上には、いつのまにか雲の形があきらかになつてきていた。

前日まで雲ひとつなかった空が、いちめんに雨雲の斑に覆われている。

「和尚様、これは雨になりますぞ。間ものう降つて参りんさるぞ。竜神様のご到来じゃ」
勘三郎たちは驚喜した。

頭上の雲の動きははやい。

漁師である勘三郎は、雲の色が黒ずんでいるのをみて、雨が降ると確信する。白い雲は風を呼ぶが、黒雲は雨を誘うのであった。

海上が波立ち、うねりがでてきた。南風のいきおいがつよまつてきたのである。

物外は立ちあがり、沖をみた。

「あつ、あそこはもう雨じゃ」

勘三郎は遠方の海面を指さす。

いう間もなく大粒の雨が船板を叩きはじめ、たちまち船は滝のように白く煙るすだれのなかにとりこめられる。

「雨じゃ、降ってきおったぞ。和尚様の祈願が効験をあらわしんさった」

船中の男たちは頭から濡れそぼって、手をうち足をふみならし歓喜の声をあげた。

尾道の山野にょどんだ暑熱をふきはらう大雨は、三日のあいだ衰えをみせず降りつづいた。炎天の下に疲弊^{ひげ}していた田畑山林の五穀草木は、たちまち生色をとりもどし、さわやかな緑がよみがえった。

雨のあがった朝、梵鐘を積んだ二艘の五十集舟は、吉和浜から沖へむかった。八大竜王に約した通り、梵鐘を海中に沈めるのである。

物外は祈願をおこなった海上に船を停めると、さっそく梵鐘を吊り下げている太綱を切りはなそうとした。

そのとき同船していた梵鐘の施主が、物外の手をとめた。

「ちと待ってくんさいや、和尚様」

物外はげげんな顔でふりかえる。

「もう雨が降って、願望が成就してしもうたんじやから、いまさら梵鐘を沈めるような、もった

いないことをするには及びませんじやろう。この半鐘は私の家の軒に吊るしとったものじやが、これを身代りに沈めて梵鐘はお寺へ持ち帰って下さらんかのう」

物外は小さな半鐘をさしだす施主を睨みつけて答えた。

「なんじやと、そなたは先日梵鐘のことを相談に参ったときは、こころよく応じてくれたじやろうが。それを大雨を降らしてももうた今になって、約束を反古にするとは、竜神をあざむくことになろうぞ。このたびの潤いは、尾道のみならず、近在の農民漁師数十万の苦しみを救うてくれた。それほどの恵みを与えてくれた竜神を、なんであざむくことができようぞ。考えてもみんない」

施主はいいかえす。

「和尚さんはそげんことをおっしゃるが、世間では神仏へ奉納の品というものは、雛形じやと決まっとるようなものでしょうが。この梵鐘は僕の先祖冥福のために奉納したもんじやけえ、海へは投げられん。半鐘でこらえてやってつかあさい」

物外は眼をいからせ、満面に朱をそそぐ。

「僕が精魂こめての祈願は、竜王を欺すためのものではないわ。いったん承知しておきながら、いまになってかれこれいうのは、理不尽のことじや。さようなことを申されるのなら、こちらにも考えがあるぞ」

物外は叫んで立ちあがった。

ふだんは温和な物外の、すさまじい憤怒の様を、船中の勘三郎たちは息を吞んで見つめてい

た。

物外は衣の袖をまくりあげたかと思つと、五十集舟のあいだに架け渡してあつた丸太に手をかけ、梵鐘を吊るしていた綱を解く。

そのまま海へ沈めるのであらうと眺めていた勘三郎は、物外が竜頭に手をかけ梵鐘を片手でひきあげはじめた様を見て、眼を疑つた。

二艘の大船は大揺れに傾くが、物外は大人が十人がかりでも持ちあげ難い梵鐘を、片手でひきあげるなり、裂帛の気合を發した。

船中の男たちは、魔法を眼のあたりにする思いで、言葉を忘れた。物外が気合とともに梵鐘を肩にかつぎあげ、さらに揺れうごく船板を踏みしめ、頭上たかくさしあげたからである。

「そりやあつ」

物外は大喝とともに、梵鐘を宙に投げる。

それは三間ばかりもはなれた海に、飛沫をあげて没した。

「怖ろしい力じゃ、こりや人間じゃなあぞ。天狗の化身ではなからうか」

勘三郎ははじめて眼のあたりにした物外の臂力に、動転した。

「和尚様、どうぞお許し下さりませ。私が悪うございました。いったん約束しておいて、四の五の申したこと、許してつかあされ」

梵鐘の施主は身を震わせ、舟板に額をすりつけて詫びた。

彼も物外の人間技とも思えない力をみせつけられ、恐怖したのである。